

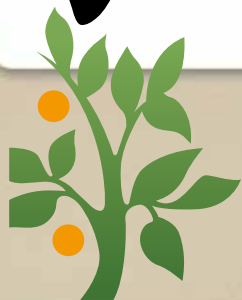
支えあう喜びを新しい世代へ

Issue Number

36

Calebasse

# からばす



# CARA

ASSOCIATION POUR LA COOPERATION ET L'AUTOGESTION RURALE EN AFRIQUE DE L'OUEST

企画/編集/発行 特定非営利活動法人  
カラ=西アフリカ農村自立協力会



## 初

### めての日本訪問

カラ 現地スタッフ アワ カンサイ

#### ■ 最初のショック

今年2016年7月15日の夜18時15分、憧れの東京・羽田空港に着いた。

前日深夜近くにバマコをAF(エアーフランス)で出発、機中では眠れないほどにウキウキしていた。シャルルドゴール空港では約11時間の乗り換え時間があったが、私は時計を持っていなかったので時計のある場所から動かず、ジーンと時間がたつのを待っていた。しかし、昼頃になるとお腹がすいてきた。村上が6月にマリに来た時に来日時の注意をいろいろと教えてくれた中で、「機中で食事に出たパンを余分にもらい、乗り換え時間に食べたらいい」と言われていたので、それをランチに食べた。オレンジジュースを買ったが2,000cfa以上と高価なのでビックリ! マリでは400cfaも出せば買えるのに、と思いきりのショックだった。

そして空港の待ち時間で驚いたことは、免税店に高級な品物が多く並び、それを沢山買っているアフリカ人がいて、「こんなにアフリカ人は金持ちなのか!」とショックをうけたが、多分買った品物は国に持ち帰り、金持ちに売るのでだろうと思った。

#### ■ 中国へ研修に向かうマリ人

シャルルドゴール空港で日本への便を待っている時に、私の座っている椅子の横にマリから一緒だった男女の団が座った。多分17~8人だったと思う。同国人という親近感から話が弾み、彼らはセグー地域から北京へ向かうのだと聞いた。マリへの支援の一環として、セグー地域に中国の団体が製靴工場を開設、そこで将来指導者として働く為に3ヶ月の研修を受けに北京へ行くのだという。この度の研修への出発の為に、100人以上のマリ人が事前にセグーで靴製作の研修を受け、その結果優秀な人たちが選ばれ北京へ向かうのだという。来年からは市場にマリ製の靴が作られ販売されるからそれを



—アワ羽田着—  
羽田に着いたアワカンサイ、向かって  
右は鈴木理恵先生。

<http://ongcara.org/>

2016/11/1 発行

NO.36

からばす

買ってくれと宣伝もされた。私は今回の日本行きに備えて、かっこいいと思った中国製の靴を10,000cfa(約2,000円)も出して買い履いて来たが、すでに靴底がパカパカしていつ壊れるか非常に心配である。これからはもっと上等な靴が出来るのだろうか？

## ■ 羽田に着いた時

案の情、手荷物検査で私の荷物がすべて検査された。不都合なものは勿論持っていないが、ジュースを作るための乾燥ハイビスカスを持っていた。若い担当官が「これは何ですか」と聞いたので「ハイビスカス」と答えた。再度聞かれたのでまた同じように答えた。しかし彼は乾燥ハイビスカスというものの存在すら知らないらしく、周囲にいた老年の担当官を呼んでアレコレと眺めていたので「ティー！ スッパイ！」と答えたら、周囲の人たちがドット大声で笑いだし、「イイヨ イイヨ、行きなさい」と手で出口を示してくれた。私も「アリガトウ」と言ってニコッと愛想笑いをして出て来た。

村上は来ているだろうか？ と心配しながらオズオズとロビーに出てきた。しかしそこには村上はおらず、宮城学院の鈴木理恵先生の「アワさん」という大声が聞こえて安心した。村上は飛行機が到着して1時間も経過しているのに私が出てくる気配がなかったので、心配して案内所に聞きに行ったところであった。でもすぐにいつも通りの村上に会うことが出来た。

## ■ 日本で最初に感激したこと

たくさんの方が私に感激を与えてくれた。羽田空港は清潔でゴミは一つなく、ピカピカの床は滑りそうに綺麗だった。迎えの人たちもキチンと決められた場所で待っていることや、ポーターがチップを貰うために先を争って旅行者の荷物を運ぶ光景も無く、バマコ空港とは違っていた。非常によくオーガナイズされていることであった。

少し恥ずかしかったことといえば、バマコの空港を出る時に、村上から借りた大きなスーツケースの他にもう一つの荷物があつた。これは中国製のバッグなのですぐ壊れることを想定し、かっこよくはないがバマコの空港で透明ビニールで全体を嚴重にグルグル巻きにしてもらつた。しかし羽田に着いたらそのような荷物を持っている人は一人もいなかった。みんなきれいなスーツケースで、運ばれてくるのも順序正しくキチンとベルトに乗ってきた。

空港からはカラの事務所に行くために吉祥寺行きのバスに乗つた。鈴木先生が夕食を買ってくれたのでバスの中で食べることになった。後で聞いたがこれは、「弁当」というのだそうだ。この弁当を開いた途端とても綺麗で、小さく切つた色々な食べ物が入り込んでいた。こんなのは見たこともなかった。米はマリでも食べるが、他は当然初めて食べるものばかりであつた。嫌いなものはなかったが、全部は食べ切れなかった。

バスの窓から見える夜景がきれいだった。明日から日本での生活ができると思ひ、このような境遇に満足した。感激することが多かつた。

## ■ 東京の初日

目が覚めたら、東京で村上の家の布団に寝てた。まったく嘘のような現実である。少し前までマリの農村にいて村の人たちと活動をしながら賑やかに過ごしてたのに、飛行機に乗ると簡単に、しかもすぐ直ぐに着くことができるという現実がまだしっかりと信じきれない。村上と在日中の仕事の打ち合わせをしてから、近くのマーケットに出かけたが、ここでもびっくりした。店の中にゴミは落ちていなかった。商品は棚にキチンと並んでいる。一つ一つ清潔にパック詰めになっていて、マリのように生きたままの鳴き声をあげる鶏は売ってなかったし、血を垂らした牛肉もぶら下がって

なかった、ハエも飛んでいなかった。

お金を支払うとみんな「ありがとうございました」と挨拶をしてくれ、なんて親切なんだろうと思った。この親切で思い出したが、羽田に着く前に入国書に記入する必要がある。しかし、この書類の説明や質問はフランス語ではなく日本語と英語だった。AF（エアフランス）に乗ってきたのに、フランス語で書いていないとはおかしな話だと思いながら、フランス人の乗務員に説明してくれるようたのんだら、「今忙しいから」と簡単に拒否された。仕方がないので日本人の乗務員に頼んだら快く引き受け説明してくれ、とても親切だったので「ご親切にありがとうございます」と言ったら、「これは私たちの仕事ですから」とニコッとしてくれた。なんて親切だろうと思った。

## ■ 宮城学院の生徒さんたちとの触れ合い

今回の来日は宮城学院創立130周年記念行事「出会いのちから 新しい歴史のページが始まる」に村上と参加するための招聘である。同大学の講堂で行われる記念式典への参加や講演、生徒さんたちへの授業、文化祭、お母さん方へのアフリカ料理の講習会、その他多くの行事への参加日程が組まれていた。また市内のホールで仙台の他の団体とのパネルディスカッションにも村上と参加した。すでに私の名前は生徒さんたちがよく知っていて、朝学校に行くとき窓から大声で「アワさん おはよう!!」との声がかかり、廊下を歩いている私の服が珍しいらしく触ってみたいとした。日本に来るために私は付け毛をし、長髪にして細い三つ編みにしてきたが、それにも触って「スゴイ スゴイ」と言うので、私もこの言葉を覚え、びっくりした時には「スゴイ」と言うことにした。帰る時にも校庭から生徒さんが集まって来て「アワさん さようなら」と言ってくれて、とてもかわいかった。このように私の名前を知ってくれていたのは、マリにいらした鈴木理恵先生が創立記念週間の行事を生徒さん主導で行うために、その準備を通して生徒さんたちの役割を分担し、折に触れて私のことを説明してくれていたためだという。とても初めて会った人たちとは思えなかった。それから、仙台案内担当の生徒会長と他の生徒2人が、私と村上を水族館に案内してくれた時にも、とてもよく世話をしてくれ、アイスクリームを買って来てくれた。とても美味しかった。すべてマリとは違う世界が広がっていた。

文化祭では生徒さんたちの部活の発表や展示物も見せてもらい、マリの工芸品紹介コーナーではマリの衣装をボディーに着せた。この日は鈴木先生もマリの服装で、とてもよく似合っていると思った。カラの販売コーナーも生徒さんたちが担当してくれた。茶道部の抹茶席に鈴木先生と入り、日本人のように抹茶をいただいた。抹茶のいただき方を事前に教えてもらっていたので、チャントできたら、周囲のお母さんたちも鈴木先生も驚いていた。とてもいい気分だった。茶道部の生徒さんたちはみんな着物を着ていて、汗をかいてかなり大変そうだった。このような生徒さんたちの文化祭はマリでは見たことがなかったのでとても興味があり、私も学生になったような気分だった。

## ■ 講演について

日本に着いて数日後にカラが私の歓迎会を開いてくれたので、マリで会ったことのある多くの人に出会えて懐かしかった。準備されたレストランで中央に座り歓待されたのは初めての経験であった。翌日は村上と赤十字病院へ見学に出かけたが、マリの病院とは全く違い、素晴らしい設備と親切な人たちの仕事ぶりに「私はこの病院で働きたい」と村上に言った。「それは無理、もしアワが日本人と結婚して日本国籍になったら日本で働くことも可能かも知れない」と言われた。子供の頃に住んでいたアビジャンの病院に似てい



文化祭で、マリの工芸品を販売して下さる生徒さんたちと一緒に。



るところがあった。

次に私を待っていたのは村上と一緒に言う講演会だった。それらは既に日程が決められて準備されていた。助成元へのあいさつを兼ねた活動成果の報告会のようなものだったが、カラを支援してくれている会の名前は常に村上から聞いていたので、メンバーの方々は旧知の間柄のような気分だった。WF基金や日本中近東アフリカ婦人会の方々への活動報告会では、ご支援によって確実に村の女性の生活が変わり、収入を得るようになったことを説明し、満足して下さったのではないかと思った。質問も多かった。

このような報告会の時には、マリの女性の現状や立場・自立への道などをメインに紹介し、女性の抱える問題についてカラがどのような方法で支援を続けてきたのか、そのたどってきた経過と成果の説明をした。その時には、私も一人のアフリカの女性として、自分の生い立ち、境遇や家族内での立場なども説明した。時々バンバラ語が入るので村上の通訳は私には都合がよかった。

高崎市のバース大学での講演会の時には東京駅から初めて新幹線に乗った。丁度昼食時だったので、村上が弁当を買ってくれた。何が食べたいかと聞かれても、よくわからずに返事が出来なかったので、オレンジジュースとサンドイッチを頼んだ。日本のオレンジジュースは本当においしかった。この後いつもオレンジジュースを頼んで飲んでいて。初めての新幹線はウキウキ気分で嬉しかった。この大学の生徒さんたちはみんな医療関係の技術を学ぶ生徒さんたちであり、発展途上国の医療に興味を持っているようだった。7月31日には、カラ主催のトークイベントを行い、私が「マリの女性の姿」、セネガル人のマンスール ジャニュ氏が「アフリカ・アフリカ と言うけれど・・・」、最後に代表の村上が「支援を振り返って」と題して講演した。この時の司会はカラ常任理事の薛氏であり、通訳を伊禮氏が担当してくれた。和やかで楽しかった。

## ■ 仙台で

私にとって2度目の新幹線で仙台へ向かった。車窓からみえる田舎の田園風景は絵のようにきれいで、川の流れも山も林も緑が濃く、畑も田んぼも線で引かれたようにきれいで、全く見飽きることがなかった。仙台に到着した初日は、宮城学院で先生方の会議で初めてのあいさつをした。皆さんには鈴木先生が紹介して下さった。毎日何かしらの計画が組まれていた。創立130周年行事の企画委員の生徒さんたちにも紹介していただき、ランチをご一緒した。中学生の社会科の授業では「マリをよく知る」という内容で、質問形式で授業が進められ、いろいろな質問があった。1年生は非常に活発で手を挙げて質問をしてくれたが、高学年になるに従い無口になる印象だった。授業の最後にはダンスをしたり、マリの衣装を生徒さんに着せてあげたりした。しかし生徒たちは私の周りを取り囲むだけで、恥ずかしがって踊らなかった。これはマリの生徒たちとはかなり違うように思った。授業の時に「フランス語を覚えて来たので聞いてください」という生徒さんが一人いた。これらの授業で生徒さんたちの頭にはマリの印象が強く焼き付いたと思う。

8月21日開催、宮城学院中学校高等学校の主催によるトークイベントが開かれ、テーマの「世界の女の子の問題を考えよう」に参加した。この時の放送担当は宮城学院放送班だった。多くの部門を生徒さんが



宮城学院中学校高等学校校長先生がアワと村上を生徒さんに紹介してくださいました。



中学生の授業で、生徒さんがマリの衣装を着てくれました。

受け持ってくれた。今回の来日の最大目的である「出会いのちから 新しい歴史のページが始まる」というテーマの、宮城学院創立130周年記念行事の式典の日は、朝からかなり緊張した。この式典用に準備したグランブーを着た。この式典も生徒さんたちの主導で行われた。私はこのために招待されてきたので、30分間程度だが重要な挨拶をしなければならない。講演内容は村上と何回も練り直し、声を上げて読み、練習した。間違わないようにと念じた。講演テーマは「皆さんの支援に感謝を込めて」。なんとか無事に挨拶が終了すると、村上が舞台上がって来て私のグランブーについて会場のみなさんに説明をした。当日午後は【トークセッション～教育の持つ力～未来を創るということ～】に村上がパネラーで参加したが、通訳女性が説明をしてくれなかったのが残念であった。

この日は1000個の小型のジェンベ（アフリカの太鼓）が運び込まれ、在日南ア人の指導で講堂が割れんばかりの大音量でジェンベの指導が行われた。年配のOGの方々や校長先生もみんな一緒にジェンベをたたき、非常ににぎやかに過ごした。舞台上でダンスが始まった時には私も我慢しきれず、舞台に飛び入り参加して生徒さんたちと踊った。非常に楽しかった。

16日間の仙台滞在中は、生徒さんたちとの交流だけではなく、支援をいただいていたカラヘルプ仙台の方々にもお目にかかることができたが、そこでも私の着ていた服はやはり珍しがられた。これまでの感謝を込めて村上とお礼の言葉を述べ、活動の成果を説明した。皆さん満足した様子だった。そして美味しい昼食を共にした。私はティガティゲ ナ（ピーナツソース）を作って参加した。

学校ではPTAのお母さん方にマリ料理の講習会を開いた。これに校長先生も参加なさったのでビックリした。この日の料理は、鶏肉を入れたオクラのソース、カボチャのトウとトウジンビエのモニ、皆さん美味しいと言って下さった。計画されていた日程・内容を大切にクリアしていったつもりだが、しかし不十分だったこともあったのではないだろうか？ 実際にマリを訪れたことがない方々は、私の話だけでは現状を理解するのは非常に困難ではないか？ と思った。皆さんが自分のことのように心にかけて、助けてくださる姿を現地の村の人に確実に伝える義務があると感じた。

仙台での16日間が過ぎると日本での日程も残り少なくなった。

仙台から帰り、数日して村上と京都・広島への小旅行に出かけた。やはり新幹線に乗っての旅である。暑い京都をテクテクと歩くと、あまりの中国人観光客の多さに驚いた。買い物に来ているのだという。さすがにマリでたくさん走っているのを目にする【ジャカルタ】というバイクは一台も目にしなかった。巖島神社にも行って船にも乗った。過去に原爆が投下された広島は美しい町であったが、原爆記念館で村上の説明を聞き、その時を想像して涙が出た。確実に人が死ぬ、という行動を何故人はするのだろうか？ 今のイスラム国も同じだ、互いに尊敬しあって話しあいで解決できないのだろうか？ と考えた。

## ■ 私のこと

私は1971年6月生まれで45歳である。今回のように、日本に来ることになるとは想像したこともなかった。今回初めての来日で得た経験は、私に想像以上の驚きと喜びを与えた。私は19年前村上に「勉強してカラのスタッフにならない？」と声をかけられ、即時に「ハイ」と言った。今考えると、この瞬間から私の人生が大きく変わったと思う。

その後、カラの支援で直ぐに女性適正技術の研修でバマコに行き、今は亡くなったマダムジャワラの団



宮城学院創立130周年記念行事の式典で講演するアワカンサイ。

体で技術を学んだ。また、JICAの事業を始めるにあたって再度バマコのアサコバファ診療所のドクタージャラの下で、保健コーディネーターとして2度にわたって研修を受けた。このような経過をたどって現在の立場にたどり着いた。

12人兄弟の丁度真ん中に生まれ、6歳の時にアビジャンの親戚へ預けられ、中学校までの教育をかの地で受けた。結婚のためにマリの両親から呼び戻されたのが16歳の時だった。マリに帰国して高等学校へ進学し、助産師になりたいと思い勉強を始めたが家が貧しかったので叶わず、両親から結婚を強いられた。娘が結婚するとその両親は経済的に豊かになるからである。しかし、隣国とはいえマリ人とコートジボワール人では意識がとても違っていた。私はそれが嫌で両親の進める結婚を拒否し、毎日のように父親に折檻され泣いて過ごした。高等学校への進学をあきらめ、バナナやマンゴ・オレンジなどを皿に積み、頭にのせて毎日路上を売り歩き、その収入を母親に渡して家計を助けた。適齢期をかなりすぎた27歳で結婚したのもこのような理由であった。しかし、夫が森林技術者としてカラに雇用されたのがきっかけで、一緒に赴任先のバググ村へ来た。何の技術もない平凡な主婦だった私が村上に声をかけられて、チャンスに恵まれ、助産師(学歴がないので国家資格は得ることが出来ない、診療所の認定だけである)の資格を得て、保健だけでなく適正技術やマイクロクレジット等、色々なことを村の女性たちに指導するようになった。以前の自分でない自分がある。神に感謝したい。これからは、学ばせてもらったことをさらに多くの村の人たちに伝え、人々が幸せになるよう努力をしていきたい。

日本での生活は毎日驚きの連続であり、毎日いろいろな新しいことを見、知った。カラの理事の方に案内してもらい、老人介護の施設も訪問した。東京観光の時にスカイツリーも見た。ビルとビルの間にもビルがあって、そこを電車が連続して走っている。

村上がSUICAを準備してくれた。駅の改札口でモタモタしていると後ろから押された時「アッ、ここはマリではない、東京だ!!」と思った。エスカレーターの利用もエレベーターに乗ることも覚えた。満員の電車で押されて「キャー」と声を上げたら横の男性に笑われた。目的地に着くためには何度も電車を乗り換えた。早め早めに準備して他の人の行動に遅れてはいけないと思った。発展した国は目まぐるしかった。村上に「ホラ、ホラ」と注意されて過ごした。モタモタとのんびりしてはいられなかった。「イン シャラー」(イスラム教で神の思召しによって、と言う意味)と言って神任せにするような、マリでの生活感覚とはあまりにもかけ離れた現実社会であった。

しかし私は日本のことがとても好きになった。是非また来たいと思う。この場をお借りして、私のためにいろいろなことに心を砕いて下さった方々へ、深くお礼を申し上げます。

## 現地事業の進行状況



### ① 学校建設

現在4校の小学校が建設中である。今年は予想外に雨量が多く、7月初めから大雨による道路の決壊が始まり、建設中の村を訪れることが困難な状況になった。しかし4月中にほとんどの資材を運び込んでいたため、建設作業は大きな問題もなく進行した。

はじめに建設がほぼ終了したのはドンギネ小学校である。この村では村長が毎日建設現場に出かけ建設状況を見守っていた。



次いでコニナ小学校の3教室が建設を終えた。6月以降はモバ小学校、ゲンドウ小学校の建設に入ったが、10月現在この小学校もほぼ建設を終了している。学校で使用する机や椅子等は完全に雨季が明けた頃を見計らって運び込む予定である。

## ② 新規開設の産院状況と女性保健普及員『K会』の働きぶり

50人のK会メンバー（6ヶ村の女性たち）が、今年5・6月と続けてバブグ地域に開設した助産院を中心に大活躍しています。学習会を月に2回と、村の清掃を4回実施しています。これは、トウグニ地域とは大きく異なることです。カラは助産師のみを育成していますが、バブグ村でもニヤマコロブグー村でも一般診療を受け持つ看護師も希望しています。看護師については、村がすべて負担するように申し渡し、村では3ヶ月分の給料を蓄え独自に雇用しました。



—バブグ産院— バブグ村産院で助産師と看護師。



ニヤマコロブグー村産院開所式の日、助産師。

## 国内活動

- |         |  |
|---------|--|
| 4/3     | 日本歯科大学校友会主催【女性歯科医師の集い2016】にて講演<br>@ホテル メトロポリタン エドモンド |
| 5/15    | 盛岡二校白梅同窓会東京支部にて 活動紹介 @中野サンプラザ                        |
| 5/21    | 明星大学にて講演 @明星大学                                       |
| 7/26    | 活動報告会 @日本中近東アフリカ婦人会                                  |
| 7/31    | 【カラ講演会 ～アワを囲んで～】 @日本歯科大学九段ホール                        |
| 8/1     | 【マリの医療について】講演 @高崎市 群馬パース大学                           |
| 8/10    | 活動報告会 @WF基金  |
| 8/15～31 | 【宮城学院創立 130 周年記念祝典行事】に参加 @宮城学院（仙台）                   |
| 9/29    | JICS 事業報告会 @ JICS 会議室                                |
| 10/29   | 【岩手県紫波町ふるさと会の集い】にて活動紹介 @ 東武ホテルレバント東京                 |

## ・・・事務局から・・・

2016年7月のアワの日本訪問は、カラにとっては最大のイベントともいえることでした。滞在中は計画されていた予定をすべてこなし、滞在日数が足りない程でした。この間の状況の一部を本稿に掲載いたしました。

現在まで機関紙「からばす」を年間2回（4・11月）発行し、マリ現地と日本での活動状況をご報告いたしておりましたが、2017年度からは年間1回（37号は2018年1月予定）の発行と致しますのでご了承ください。なお、年次報告書は従来通り6月発行予定です。引き続きご支援をお願いいたします。

特定非営利活動法人 カラ=西アフリカ農村自立協力会

<http://ongcara.org/>

東京事務局

〒177-0054 東京都練馬区立野町7-9 クリオ吉祥寺壺番館101

Tel:03-3929-5767

E-mail: [centre@ongcara.org](mailto:centre@ongcara.org)

バマコ事務局

BP E367 BAMAKO MALI

Tel:223-2020-9096 Fax:223-2020-3589